

関西の産学と北海道の産学を結ぶ ソーシャルビジネスのオンライン研究会事例報告 - 地域活性化とリーダーシップ育成の観点から -

○福重 八恵（阪南大学）

1. はじめに

従来、人口の二極化に伴う地方の衰退や開発による環境破壊等の社会的問題は、政府や地方自治体などの公的機関が解決すべきとする考えが根強くあった。しかし、時代の変化に伴って、解決が望まれる社会的課題は多様化、複雑化していることに加え、財政の逼迫やシステム的な限界もあり、公的機関のみでは十分な対応ができなくなってきた。かかる状況を背景に、社会的課題やニーズを「市場」として捉え、課題解決のための取り組みを持続的な事業活動として展開するソーシャルビジネスに期待が寄せられるようになった。

他方、大学に対しては、産学共同研究や技術移転をはじめとする理系を中心とした社会貢献にとどまらず、地域の活性化やまちづくりなど、豊かな社会の形成につながる幅広い社会貢献に期待が高まっている。

そこで 2021 年度より、地域の資源を活用して商品開発等のソーシャルビジネスに取り組んでいる北海道士幌町立士幌高校、開発に伴う人と野生動物の軋轢の解消について研究する帯広畜産大学浅利研究室、地域活性化を担うリーダーの育成について研究する阪南大学福重研究室、教育サービスをはじめとした各種事業をグローバル展開する株式会社 ECC、地域おこし協力隊から起業してまちづくりに貢献する合同会社 Sun Village の産学及び高大連携により、地域活性化とリーダーシップの観点からソーシャルビジネスについて検討する取り組みを開始した。本稿ではその第 1 回オンライン研究会の事例を報告する。

2. 取り組みの概要

初年度の 2021 年度は、12 月 17・20 日の 2 日間にわたり、Zoom を用いたオンライン研究会として実施した。士幌高校生が取り組んでいる特産品の商品開発をはじめとした地域活性化の活動等を題材として、「うまくいったこと」や「うまくいかなかったこと」を振り返りながら、それらの要因をリーダーシップの観点から分析し、発表会を行った。

参加者は、士幌高校生 12 名、帯広畜産大学生 6 名、阪南大学生 14 名、高大教員 3 名、企業関係者 3 名の計 38 名で、高校生 3 名に大学生 4・5 名が加わった、1 グループ 7・8 名の 4 グループ構成とした。

司会進行をはじめとする研究会全般の運営と、分析に用いるフレームワークの講義やグループ内でのファシリテーター、ホワイトボード（発表用 Word ファイル）の作成は阪南大学の学生が担当し、高校生のディスカッションのサポートは地元の事情に詳しい帯広畜産大学の学生が担当した。また、研究会までの準備や研究会当日のネットワークトラブル等への対応には、参加校の教員 3 名と帯広畜産大学の代表学生が協力して当たった。

3. プログラム

研究会は高校の授業に合わせて 1 コマ 50 分とし、1 日 2 コマ×2 日間の 4 コマで実施した。プログラムは以下の通りである。

【2021 年 12 月 17 日・1 コマ目】

- Zoom の操作説明
- グループに分かれてアイスブレイク（その後メインルームに再集合）
- はじめの挨拶
- 研究会の趣旨説明
- 関係者の紹介と一言メッセージ
- 分析に用いるフレームワーク「6 つのリーダーシップスタイル」（ゴールマン）の講義

【2021 年 12 月 17 日・2 コマ目】

- ディスカッションテーマの説明と質疑応答
- グループディスカッション（その後メインルームに再集合）

○ 連絡事項等

【2021年12月20日・1コマ目】

○ 発表会の説明

○ グループに分かれて発表準備（その後メインルームに再集合）

【2021年12月20日・2コマ目】

○ 発表会

○ 合同会社 Sun Village 代表 服部氏からのコメント

○ 株式会社 ECC 事業部統括 清河氏からのコメント

○ 株式会社 ECC 人事部 岡本氏からのコメント

○ 帯広畜産大学 浅利准教授からのコメント

○ 士幌高校 進藤教諭からのコメント

○ おわりの挨拶



図1 メインルームの画像



図2 グループディスカッションの画像

○ 取り組み事例(1)「どら焼きの皮をふるさと納税に出す企画」

<上手くいったところ>

どら焼きの消費期限を1週間延ばした。

<使っていたリーダーシップ>

強制型：先生が決断してくださった。

<上手くいかなかったところ>

商品名が発表ギリギリまで決まらなかった。

<使った方が良かったリーダーシップ>

民主型：意見を募った方が良かった。

関係重視型：もっと周りと連携した方が良かった。

○ 取り組み事例(2)「牛乳を自分たちで加工販売する企画」

<上手くいったところ>

牛乳の乳質がアイスクリームに適していることを発見した。

<使っていたリーダーシップ>

民主型：みんなで決めた目標に向けて、協力しながら試行錯誤できた。

<上手くいかなかったところ>

牛乳の酸味が強くヨーグルトに適さなかった。

<使った方が良かったリーダーシップ>

ビジョン型：目標が明確ではなかった。

強制型：活動時の雰囲気が緩かったので、引き締めるリーダーが必要だった。

図3 発表用ホワイトボードの画像

4. まとめ

研究会終了後、開催関係者により総括を行った。ここではその結果をまとめる。

第1回研究会では、地域の活性化に寄与するソーシャルビジネスの実践事例について高校生が大学生に情報提供し、その成功要因や課題の克服策等を、大学生がサポートしながらリーダーシップの観点から分析した。参加した高校生や大学生にとって、これらの領域に関する理解を深めるきっかけとなったものと考えられる。また、地域、年齢、専門分野、事業内容等の違いを超えて、企業・大学・高校の連携を構築する第一歩となった。

一方で、オンライン研究会としての課題も残った。制限時間がタイトな中、オンラインの議論で発表にまでもっていかねばならないファシリテーターは、グループ内の高校生と個別にやり取りする方法を取らざるを得なかった。そのため、グループのメンバー同士が議論する場面はほとんど見られなかった。今回は大学生がファシリテーターを担当したが、たとえ企業関係者がファシリテーターを担当しても同様になったと考えられる。今後は発表を重視するのではなく議論を重視するとともに、オンラインと対面を組み合わせたハイブリッド型の研究会にする方向性を共有した。

また、2022年度は、第1回研究会の参加者に対して、リーダーシップに関する企業評価をフィードバックし、社会で求められる能力を高めていく研究会と、地域活性化のためのイベントや商品開発の企画等について検討する研究会の、計2回を開催する計画も共有した。

【謝辞】本研究は阪南大学国内研究の支援を受けて行われた。関係者一同に謹んで謝意を表す。